

- ◎11月30日中古車を買った、長い2ヶ月間をイライラ悩んで胃まで痛くなったがやっと決めた。その店が摂津市の鳥飼上で反対側は柱本だ。そんなわけで、2時間半もかかった売買契約が終わり、「ちょっと歩こう その前に 向かえの 牛井屋で 腹ごしらえ」淀川までちょっとの距離を自転車で走った。「どんなスタイルの車だったのかな・・・？」いい加減な話である。今までも車にはさほど興味は無い、乗ればいい、走ればいいという人なのである。
- ◎淀川河川敷、5年ぐらい前はよく来ていたが無沙汰だった。どこを登って土手に上がるのがいいかというようなルートはもちろん覚えていたが、たった5年のご無沙汰だが懐かしい想いが湧く。村立鳥飼小学校時代は“中の村”“上の村”と呼んでいたように思うが、上の村の端っこまで足を延ばしたことが無かった。隣が柱本、その地名は茨木市内に暮らす元悪ガキ連の話から、地の果てまではいかないにしても、果てのような表現を聞いたことがある。小学生時代の淀川は、草ぼうぼうで“ワンド”だらけ、そこに顔ぐらいの大きさ黒く臭い貝がよく目についたのを覚えている。しらべると“ヌマガイ”という名で臭いらしい。今はこのあたりワンドを埋め立て“河川敷ゴルフ場”になって営業している。しばらく歩くと橋が見えてきた、「おお そうそう 百円橋 仁和寺大橋 斜張橋の橋だ」形は相似形で美しい。早足で40分ほど歩いたが鳥飼大橋までたどり着かない、今日はヘッドライトを持っていないのでそのあたりから引き返した。陽の落ちるのが早くなってきた、先日まで6時と思っていたが、今日は5時には薄暗くなり、帰り着いたころには暗くなっていた、無灯火自転車なので、アウトぎりぎりである。
- ◎シルバーのノアという名の車、「色は あまり好きじゃないが 60万という 金額 いろいろ 選べるわけじゃなし そこにあったもので 決まり ま いいか」である。整備士上がりの営業マンのNさん、「中古車は走行距離が少ないほど エンジンが痛んでいない」「毎回のメンテを ちゃんとしたところで やっているかが大事」そう言われると耳が痛い。廃車にしたアコードにしてもオートバックスでの車検時、「必要なものだけに お金を使う」とケチケチ作戦で乗り切ってきた。同じ金をかけないにしろ、ちょっとぐらい掃除をする、磨き上げるそういう作業もなかったね。ただ、アコードの場合、13年目でわが家に来てから外装塗装が剥げ出しみじめな状態になって行った、あの外装を磨き上げてもと、ためらうくらいに剥げだしていった。
- ◎ 「次の車が 見つからない、今の車を どうしよう 車検切れの日が 近づいてくる」焦ったね、そんなときに車屋のおっさんが、「ビックモーター 以外のところに 聞いてみたら・・・」と教えてくれた。そうそう、車検切れの日がちょうど運転免許の高齢者講習の日だった。朝、最初に出た会社のサイトに入力してみた。車の名前、走行距離、10年以上などと書いて送信すると、カーネクストの若そうなあんちゃんから電話があった。外装も内装もぼろ車で25年ぐらい、距離も14万キロぐらいで、電気系統が故障しているが、走るのはまだまだ大丈夫と言った。「1万円で いかがでしょうか」「1万円なら 今から 近所の ガソリンスタンドに行くわざわざ 来てもらわなくても いいよ」「いえいえ いくらなら・・・」「いえいえ ぼろ車だから もう いいよ」「ちょっとお待ちください 上司と 話してきます 電話切らずに 待ってください」「5万円で いかがでしょうか」「え 5万円 知らないよ ぼろ車だよ」そんなこんなで10月30日にトラックで取りに来た。書類一式を常識の形式で送ると、速達が来て実印だけ押し送り返してくれという、でその通りにしたが、いっどこでお金を支払うのか、その話は今のところまったく見えてこない。
- ◎前日に同じ系列の茨木営業所に自転車で車を見にいった。70万円ぐらいの真っ白のボクシーが一番はしっこに置いてあった。真っ白に磨き上げられていたが、距離が12万キロで修復歴があるとか書いてある。その店の中古車は、それ以外は200万円以上のピカピカがずらり並んでいた。
- ◎博子君が、「ねぎり や～」と言っていたのでコソリというと、「ちゃんと 整備するから」と一蹴された。昨日は80万ぐらいのお金をカバンに詰めていったが、銀行振り込みにしてくれという。三菱銀行と聞き、ネット振り込みと聞き、銀行にお金を入れて家に帰り、ネットバンキングをして支払いは終了した。車は展覧会搬入の前日に渡せるという綱渡りである。今は、「金を置いて 持って行って」の時代じゃないのだ。

◎陽成院御代滝口金使行語第十<やうぜいのいんのみよにたきぐちこがねのつかいにゆくこと>

◎宇治拾遺物語(鎌倉時代初期の説話集)にも同文的同話がある。両者は同原拠とみられる。幻術修行の失敗談。

◎滝口の道範(みちのり)が砂金運上使として陸奥の国へ下向の途中、信濃の国の郡司の妻に言い寄って幻術でこらしめられた。それが縁となり、郡司に入門して幻術修行を志したが適正不十分で奥義を極め得なかった。

◎まら：魔羅：今昔物語集では 門構えの中に牛という字だが、そんな字がない、検索しても出てこない・・・  
男根の異名で僧侶の隠語として使われていた。

◎郡司：ぐんじ：こおりのつかさ：中央官僚である国司の下で、郡の行政にあたる、その地の有力者になった。

◎道範という滝口の侍、とはいえ宮廷から公用で陸奥の国に派遣された侍、10人程の家来を連れ京都から陸奥の国に向かった。向かう前から行程が決められ、行く先々の宿泊先には伝達が行っている。伝達を受けたそれぞれの宿では、朝廷からの命令ということで“砂金運上使”を迎えた。

◎平安時代、京都から東北方面に旅するには、と調べてみた。古代の文献を基に研究している方がおられた。陸奥まで25~50日間という数字が出ている。京都から1ト月前後の日数で行っているようだ。30泊40泊の宿を10人ぐらいの一行が移動していたのか、行くほうも迎える方もたいそうなことだ。

◎郡司の家で宿をとったところ、待ち受けていた郡司は大接待をする。食事などのもてなしが終わったところで、家主の郡司は家来を連れて留守をする。道範寝つかれぬままそっと起き出しあちこち見歩いているうちに、郡司の妻の部屋を覗いた。屏風や几帳など立並べ、畳などこぎれいに敷き、香ばしい香りがした。二十歳ぐらいの非のうちどころのない美しい女が寝ていた。これを見てそのまま見過ごす気にもなれず、そばによって抱き寝をしたいと思った。心を込めて接待してくれた郡司には申し訳ない気がしたが、がまんできず忍び寄った。女に寄って 添い臥ししたが、女は驚いた様子もない。道範は自分の着物を脱ぎ捨てるや、女の懐に入った。女はしばし着物を引き合わせ拒む様子を見せたものの、あらがおうともしないので男はそのまま懐に入った。

◎男はそのうち、魔羅がしきりに痒くなり、手で触ってみると毛だけで魔羅がない。すっかり仰天して女の素晴らしかったことなど消し飛んでしまった。女は男が泡を食って探っているさまを見てそっと微笑んでいた。おとこはなお訳が分からず不思議で仕方がなく、そっと起き上がって元の寝所に帰り探してみたが、やはりない。何とも怪しいので、そば近くに使っている家来を呼んで、「あそこに素晴らしい女がいるぞ お前も行ってみろ」家来は喜んで出かけて行った。しばらくして帰ってきた家来が、世にもいぶかしい顔をしている。また別の家来にもけしかけたが、この男も空を仰いでひどく不審に堪えぬ面持ちをしている。このようにして七八人の家来をやったが、みな帰って来ては同じような顔つきをしている。

道綱は、歓待してくれた郡司に別れも告げず早々に出立した。しばらく行ったところで、昨日の郡司の家来が馬を走らせてやって来て、白い紙に包んだものを捧げ持っている。「これは何か」「郡司さまが 差し上げよ と申されたものです」「このようなものを なぜ捨てて 出立なされる お食事の用意をしておりましたのに」開けてみるとマツタケを包んだように、魔羅が九つ入っていた。家来たちも集まると魔羅が消え、それぞれの体の元に戻った。股間を探ると魔羅は元のように戻っていた。

◎話はここから、「ぜひこの 幻術を習いたい」というふうに進んで行く、その結果、彼は適正不十分で落第するが、いくつかの絃術を会得して都に帰った。

◎幻術、妖術、天狗、鬼・・・この時代、不思議な現象が理解されず、こんな話がたくさん出てくる。

◎陰陽道：古代中国で生まれた自然哲学思想、陰陽五行思想を起源として日本で独自に発展した呪術や占術の技術体系。安倍家、土御門家、賀茂家、勘解由小路家・・・などがあつた。これは“術”ではなく“道”だった。

- ◎相澤、前川、番匠、岡村の4人で西山古道を歩いた。三宅さんは風邪で欠席、林さんは遅刻で同じコースを単独で歩いたらしい。阪急東向日駅発7:17南春日行きバスに乗るといので朝5時台に起きて家をでた。7:30バスを降りて金蔵寺に向かって歩き出した。洛西のこのあたり、以前に来たことがあるようで、大原野神社、正法寺、金蔵寺と知った名前が連なる。地図を見てまず、金蔵寺を目指し、金蔵寺の横から善峯寺を目指した。京都の都の西の方、山の麓に古のなごりが色濃く写る鄙びた街並みの山の中に入っていった。
- ◎2.3日前から天気がぐずぐずしていた、今日も雨のち晴れの予報で、夜中に激しく降っていたが5時に起きた時点で雨は無くバスから降りたら道は乾いていた。山の中に入ると土の地面、石ころなどはまだ濡れている。初めて来た道だがいたる所に標識があり迷うことなく歩ける。東海道自然歩道の標識、金蔵寺の道を曲がって橋を渡らずにまっすぐ行けとなっている、土の道を踏みしめて歩くと小さい標識がいくつか、善峰寺と書いてある。西山古道は、善峰寺・柳谷観音・光明寺の三観音霊場を結ぶ古い道だったらしい、それを最近復活する努力をしてくれた方々がいるらしい。
- ◎前回、山崎駅から天王山を経、柳谷観音から立石橋まで歩いた。この道は平坦で足が弱い方でも楽しく歩ける道だった。今回は柳谷観音までは初めてのルート、金蔵寺から善峯寺に向かう道、最初の30分ぐらいは普通の登山道、急な斜面もいくつかあった。1時間も歩くと舗装道路(向日善峰線)に出た、舗装道路をくねくね下ると善峰寺山門手前に、西山古道の標識を見つけそこを歩いていった。ここから柳谷観音までは、谷沿いの道、山腹を削った道、幾度も渡渉があり、なかなか手ごわい、気を緩めるとズルリこけたり、岩で滑ったり、落ちたらヤバイねというような道がずっと続く。オレは濡れた谷筋の道、巻き道やトラバースよりは尾根道が好きだ。
- ◎9時頃からお陽さんが照りだした、樹々の中を歩いている、陽の光が葉や枝に遮られまだら模様を写しだす。ぱっと明るくなったまわりを感じると気持ちも明るくエイホウである。人家から離れて1キロ2キロのあたり、夜になると獣たちがうろうろ闊歩するのだろう、いたる所にけもの道が走っている、シカ君であろう。イノシシの掘り返しもいくつも見られた。今年は熊が荒れているらしい、熊が一たび興奮してくると、そのパワー、迫力、運動神経は人の数倍、とてもかなわない、お会いしたくないものだ。
- ◎ぱっと開けなんと墓石、石灯籠、寺関係の石類の大きな集積場、その横に世界平和・・・という鉄扉、いろいろなものがあるものだ・・・、またまた舗装道路に出た。そこからポンポン山はこちらの標識をしり目に善峰寺に向かってくねくね舗装道を下って行った。もう少しで山門というあたりに西山古道の入り口を見つけた。柳谷観音まで4.3キロ、川を渡り細い道を進んで行く。巻き道、山の斜面に作られた道、広いところで1メートル狭いところは50センチ、そんな道である。水が流れる谷筋は大きくリターンしてそりり進んで行く。いつも申しますが、谷筋の道、巻き道、トラバースは落ちると怖いということで好きではない。ここはさほど危険ではなく、二足歩行でずんずん歩ける、そんな道を進んで行く。
- ◎雨の後の石の渡渉、石の上に鉄棒を立ててくれている、滑らないよう平らな石に溝をつけてくれている、こんなに親切にメンテナンスをしてくれている道もめずらしいが、山に慣れない一般の方々がスニーカーで登ってくるとすってんころりんではすまない。
- ◎川筋の途中で12時になったので、開けたところで弁当を食べた。朝は早かったのでおにぎりを作っただけ、それにカップヌードルとテルモスに湯を入れて持ってきた。まずはヌードルに湯を注ぎおにぎりを食べた。おにぎりはひとつ持ち帰った。カレー味のヌードルとおにぎり一個で腹一杯になった。卵焼きやら漬物、ナシと柿をいただいた。
- ◎もう少しで柳谷観音かなというあたりで、T字路、左は柳谷観音、右は善峰寺となっている。我々は善峰寺から来たんだが・・・、この西山古道は一本道ではないのかな、不思議な案内板である。
- ◎1時頃に柳谷観音に出た、そこから天王山を抜け阪急大山崎駅から帰った。茨木でちょっと一献と居酒屋に入った、帰ったのは7時過ぎだった。

◎先日、植木屋さんに生垣を刈ってもらった。出来上がった姿を見て、ほれほれするほどきれいだと感嘆した。今までは自分で刈っていたが、「もうアカン 歳だ しんどい 電気バリカン持って 脚立に登って 力を入れて もし ひっくり返り バリカンで 自分のどこかを 切ってしまったら」なんて思い始め、今年から本職の植木屋さんに頼もうと思っていた。その植木屋さんは近所の家の仕事をいくつか持っているらしく、軽トラックでやって来た。何年か前に刈ってもらったことがある人、「あれれ えらく老けたな」前には壮年のあんなちゃんに見えたが来たおっさんは初老の感じがした。「生垣だけでいい たのんま〜す」「どうせなら中も ぱっぱとやる 3万円でもいい」5万円ぐらい要求されるかと思ったがラッキーである。

◎かつて 60 年前にここに越してきた当時、我が家の塀はブロック塀だった。お隣は河原に落ちているような青白い自然石を並べその上にカイツカイブキの生け垣だった。きれいに選定され波打ったそのスタイルを見て憧れていた。グリーンの葉っぱがこんもり上下左右してイオンエア〜を発散させていた。そのブロックもおやじの会社で作った廃材入りのコンクリートブロック、普通のものに比べ劣化が早かった。そんなわけで 30 歳のころに我が家のブロック塀が老化してきていた。たまたま知り合いの友人の旦那がオレと同年輩の植木屋さんだった。何日かで工事が終わりヒョロヒョロのカイツカイブキが並んだ。「何本かは枯れる 育たない その都度 植え替える」50センチぐらいの大きな石を並べ、そこにひよろりを植え、竹の柱と横の棒、それらをシュロの縄で結び、ひよろりも弱々しくならんで何年か経った。10本ぐらいは枯れ、どこかの植木市で買って補修していった。

◎毎年夏の暑さが終わり、10月ころになると植木を刈らねばとい、重い腰を上げていた。ひよろりのカイツカイブキもでっかくなり、お隣のものと変わらない大きさに、外からも中からも隙間なく見とおしがきかない生垣になった。むしろ立派過ぎて道路にはみ出し、しかも背丈も高い、選定するのに往生するようになってきた。電気バリカンも3代目ぐらいかな。1.5メートルぐらいの脚立を組み立てその上に腰掛ける、バリカンのスイッチをいれ、ブイ〜と流していく、同じ作業を3.4回繰り返すと5センチぐらい厚みがきれいに刈れる。ブイ〜を何度も繰り返して2時間をすれば5メートルぐらい刈れる。「さあ 今日 これぐらいにして 落ちた 葉っぱの 掃除」そんなことを何日かしてやっと全部の生垣の選定が終わる。いつも終わって、見て、「へたくそだな」と思っていたが、「ま 素人なら こんなものか」と落胆もしていた。

◎植木屋はガソリンエンジンのバリカン、3時間ぐらいでブイ〜と刈ってしまった、しかもはなはだ美しい、申し分ない、もっと早くに本職に頼めば良かったとも思うが、まいいか。

◎一昨日から急に寒くなった、先日まで、「えええ 11月に 夏日」という生暖かい日があったが、急に冬が来た。天気予報士がいうにはこの寒さは例年並みだという。若いころから11月に入ると冷えると感じていた、長袖の下着のシャツを着込み、耳を隠す帽子が必要だった。夏日から冬日に一挙に移り変わり、「身体がついてこん 寒い 冷える」とうなっている。アトリエのパソコンが置いてある机の下に、電気カーペットの足置き用、30センチ角ぐらいのものを常備している。こいつがあるとちょっと寒くなってくると足元が快適なんだが、二三日前から猫が占領している。飼い猫とはいえ元来が捨て猫、最近慣れてきてニャアとは言うが決して近づいては来ない。オレが近づけば逃げる、せつかく暖を取って寝ているところを追い出してはすまない、「いいよ 寝ていて」なんてスッと離れるようにしているが、猫のネンネはすこぶる長い。だいが辛抱して離れた所で用事を済ませているが、机に近づかないと手に入らない道具なり、材料がある、「これはアカン」しばらくするとオレも待ちきれなくなって机に近づき、それぞれの用事をすませる。猫め慌てて起き上がりでっかくのびをして階下に降りていく。猫は家族が可愛がっているが、今までかつて、猫に好かれたことが無い、なのでオレも猫は好きではない。

- ◎9:00 いつもの高速道路横の登山口に来ている。7時に家を出て阪急高槻駅まで、歩いてJR高槻駅の改札で山田さんと合流、階段を降りて上ノ口行きのバスに乗ってここまでやって来た。いつもは自転車と歩きでフーフー言っただけでここまで来ていたが、電車とバスは楽ちんコースだ。雲ひとつない青空、気持ちがいい。
- ◎予定ではポンポン山往復コースだったが、山田さんが、「善峰寺から 釈迦岳 ぽんぽん山 このコースを来たことがある」というので、「そんじゃ そのコース 魅力的」と決まった。多分前回の“西山古道”にぶつかるのでは、なんだか洛西の山も身近になってきたと喜んでいる。
- ◎三四日前ぐらいから急に寒くなってきた、冬がやって来た。それまでは11月だというのに夏日があるという不思議、一週間前にもこのあたりに来ているがその時はシャツ2枚で涼やかに歩いていた。今日は空気が冷たい、急な登りで毛糸の帽子の中が汗で濡れ、背中もいささか汗が出ているが、冷たい風がヒヤリ感じる。気象予報士も、「観測史上 以来の 異変」なんて騒いでいる。この寒さは例年通りだそうだがオレの身体は寒さについていけず、温かいシャツが、帽子が、湯たんぽが、と悲鳴を上げている。
- ◎10:15 本山寺の参道に合流した、登山口から1時間ちょっと、休みなく登った。歩きながらパンを齧って登った。パン焼き機でパンを焼くようになってもう5年以上経つかな、「美味くはないよ 決してうまくない が やめられない 毎日喰って あきない それほどいいんだ」とオレの評価である。メーカーの食パンを買っていたが、機械を買う前にいろいろ悩んだ。せつかく買ってもすぐに飽きるのでは、美味くないのでは、邪魔くさいとか、コストが高くつくのでは・・・考えてようやく買った。最初のころはドライフルーツ入りのものばかり作っていたが、半年ほどして“普通の食パン”と“フランスパン風の食パン”だけになってきた。家族は砂糖やバターの入った食パン、オレ専用は、薄力小麦をちょっと入れ、塩を入れるだけのフランスパン風食パン、これがいい、こればかり食っている。今日はこのパンのヘタをコマ切りにして持ってきた、それを齧りながら登ってきた、腹にふわり溜まって心地いい、食べやすい、けっして美味くないよとおとぼけフレーズがにくい。
- ◎ポンポン山に近づくとつれ、地面が濡れている、ダークな黄色の粘土の足元が滑る、山田さんがいうには、「京都は一日中雨だった」という。オレも思い返して、「大阪は一日中 曇っていたかな」ポンポン山には12時前に着いた。カップヌードルに湯を入れ、おにぎりを食った。今日のヌードルは普通のものだが、前はカレー味のものだった、「山では カレー味が いいねえ」と感想を漏らす。
- ◎30人ぐらいのジジババ集団がてっぺんにやって来た、どこかの山岳会のようなものである。山で会う団体は嫌だねえ、あつかましい、やかましい。「それじゃ 善峰寺に 向かおう」と歩き始めた。いつ降ってもおかしくない空模様だが、曇ったりたまに晴れたり、帰るまで降ってくれるなど天に言い聞かせつつ歩いた。曇ると空気が冷たくなりヒヤリとしてくる、陽が顔を出すとホワリ暖かい、なだらかな登山道を歩いているとベンチがある、「一本 取りましょう」と休憩して横を見るとここが釈迦岳だという、善峰寺の僧侶がここに釈迦の像を置いたのがその由来らしい。釈迦は“大嶺の釈迦が岳”北小松からの“比良山系の釈迦岳”いくつもあるようだ。
- ◎島本町で一番高い山、11世紀に善峰寺を開いた源三上人が掘った彫刻が安置されていたと書いてある。
- ◎まっすぐ進むと道が二股に別れ、右は若宮神社から水無瀬方面に、左に行くと善峰寺となっている。前回西山小道を歩いた時に、ポンポン山こっちという標識を二か所見た、釈迦に行かずにまっすぐ行くと善峰寺の上に、この道は善峰寺の下に出そうな気がする。その通りならオレの頭の中の地図が完成しそうでしたり顔になる、ドヤ顔になるなんて想像しながら進んだ。
- ◎想像通り、善峰寺に近所から「西山古道はこっち」の道に合流し、その合流地点から道路まではすぐだった。バス停はお寺から下ったところにあった。2時24分の発車まで30分ほどベンチに座って待った。なんと先程の団体がまたまたバス停にやって来た、「あれれ やだねえ 一緒のバスだね やかましいね 喧嘩までしている」
- ◎バスは麓の街をまわって、時間をかけて阪急東向日駅に着いた、一週間前に出発した駅だ、そこで山田さんと別れ、茨木まで帰り着いたのは4時前だった。

◎讃岐国女行冥途其魂還付身語第十八くさぬきのくにもをむなめいどにゆきてそのたましひかえりてほかのみにつくこと>

◎落語のネタになりそうな話である。二人の女がいて、ひとりが死んだ、もうひとりは死体が焼かれたが、魂だけが残った。「ならば 残った魂は もうひとりの女の死体 そのからだを借りて 生きていけ」閻魔様の宣託、なんと乱暴で奇想天外な話。

◎讃岐の国、山田郡にひとりの女がおった。姓は布識氏（ぬのしきのうじ）である。その女にわかにかい重い病気にかかったので、数々のりっぱなご馳走をととのえ、門の左右にお祭りし、疫病神のご機嫌をとろうとご馳走した。そのうち閻魔王の使いの鬼が呼び出しにこの家に来たが、鬼は歩き疲れていたの、この祭つてある御馳走を見てすっかりひきつけられて、それを平らげてしまった。

道々女にこういった。「オレはお前の供え物を食べた この恩返しをしたいが どうだ お前と同じ名前 同じ姓のものがいるか」女は、「はい 同じ国の 鵜足郡（うたりのこおり）に 同姓同名の女がおります」と答えた。

鬼はこれを聞くと、この女を連れて、鵜足郡の女に家に行き、その女と面と向かって真っ赤な袋から取り出した一尺ほどの鑿をその女に額に打ち込み、引っ立てて連れ去った。

かの山田郡の女は許されたので、恐る恐る家に帰っていった。と思うや蘇生した。

◎閻魔王：仏教界の話。インドでは、中国では、と諸説あるらしいが、日本では死者はまず閻魔様の前に引き出され、生前の善悪の行いを裁かれ、次はどの世界で生きていくかを決められる。最も苦しいのは地獄である。「嘘をつくと 閻魔様に舌を抜かれる」ガキの頃に脅されたフレーズであるが、今は通用しないかな。

◎さて閻魔王はこの鵜足郡の女を連れてきたのを見て、「この女は呼び出した女ではない お前が間違つて連行したのだ だから しばらくこの女をここにとどめ あの山田郡の女を召し連れてこい」とおっしゃった。

鬼は隠しおおせず、ついに山田郡の女を召し連れてきた。閻魔王はこれを見て、「まさにこれが呼び出した女だ あの鵜足郡の女は返してやれ」とおっしゃる。

だがすでに三日経ち、鵜足郡の女の死体は焼き棄ててしまっていたので、身体は無くなり、女の魂は帰入ることができず、また元に戻って、閻魔王に、「私は家に帰されましたが からだがなく 魂のよりつくところがありません」と申し上げた。

すると閻魔王は使いの鬼に、「あの山田郡の女の死体はまだそのままか」とお尋ねになる。

使いが、「まだそのままでございます」と答えると、

王は、「それでは その山田郡の女のからだをもらつて そなたのからだとするがいい」とおっしゃった。

このため、鵜足郡の女の魂は山田郡の女のからだに入った。と同時に、息を吹き返し、「ここはわたしの家ではありません 私の家は鵜足郡です」という。

◎山田郡の両親は、「娘が ここは家じゃない」という。鵜足郡の両親は、「わが 娘の姿 ではないが 言うことは娘に間違いはない」娘は二組の両親に閻魔王の話をお聞かせた。二組の両親は話を聞いて納得し、心から愛おしみ可愛がった。こうして両家が養育することになり、二軒分の財産をもったのである。

◎ここで今昔氏の一言が面白いというか、的外れというか・・・。「ご馳走をととのえて鬼のご機嫌を取るのも決して無駄なことではない」

◎出典は、「日本霊異記」だそうだ。

- ◎待望の車の納車日がやって来た、「オレの買ったのは 多分あの形 あのスタイルだと思うが」なんてあやふやな思いで、街を走る車を見ていた。今日も受け渡しのデスクでパソコン内のトヨタ車種を探したが100を超える車種があるのでは、まして同じ車種でも4.5年おきにバージョンアップする、少しずつスタイルが変わっていく。車を探し始めた最初のころ、“シェンタ”がいいと家族がいい、その車種ばかりを探していたが、最近、「街で見る車 シェンタと 書いてある あれれ スタイルが変わった 新車だね」という車が走っている。特異なデザインの車だったので、そのぶん古くなると、「なんだか古くさい」と言われるようになるか、「なかなか 捨てがたい デザインだった」と言われるかだねえ。
- ◎オレの買った車は、トヨタの販売店とはいえ、トヨタの中古車専門店、新車なら300万とか500万とかいう数字がする車が並ぶが、10年以上も乗るとどっと値が下がる、大きな声では言えないが60万円で買った。12年前のモノ、走行距離は6万キロ代、外観は擦れたような傷が少しあるが離れて見るとピカピカである。「納車時配達は1万円です」というので、朝9時に歩いて出かけた。1時間半もあるのでまずは東に向かって安威川を超え、目垣のあたりからごみ焼却場の方に向かった。まっすぐ柱本に向かい鳥飼高校の交差点に出ればと歩いた。ゴミ焼却場のあたりで地図に弱いオレは安威川を渡る橋を探した。新幹線の線路がすぐそこに見える、「おかしいなあ 狐につままれたみたい」と首をかしげながらスマホを出して地図を見ているが、これもまたわからない。どこの自治体もそうだが、ごみ焼却場は市の境にある。汚物は真ん中から遠ざけろという考え方のだろうね。市の端っことは道路が途切れていたりする。おかしいなあ、舗装道路が亡くなり泥道になり、そんな道まで消えていくという不思議。なんとか新幹線のガードを超えたあたりが摂津市、そのあたりで気付いたが、「オレは 安威川をすでに超えていたんだ 始めに東に向かって 安威川を 渡ったじゃないか」まったく遅い気づきだが、まっすぐ南に歩くと淀川の堤防が見え、柱本の標示あちこちに見られた。
- ◎トヨタに着いて、「おお あの車だ 意外ときれいだ あのスタイルだ まだまだ 街のあちこちで 走っているスタイル ま いいじゃないの」と事務所に入った。前回の席に座ろうとすると、こちらですと手招きされ、「岡村隆久様 congratulations today」という札が出ている。こういうのは照れるね、ホホホと喜びつつ、「あちゃあ」と思っていた。トヨタは中古車と言えども、車検が1年残っていると言えども、手に入るのに3週間もかかった。今日は30分もあれば終わるだろうと思っていたが1時間半もかかった。3週間前の契約時のそれぞれの確認、「それではよろしいですか」とパソコンの画面を見せられ、その都度承認しましたのボタンを押させられた。
- ◎次は任意保険の話。「今日は土曜日 銀行も開いていない 保険の話をももって 銀行の開いている日に 早く進めないと、保険金を払っていない 土曜 日曜に 車を走らせないじゃないの」という疑問がずっとあった、焦っている悪夢まで見た。西川さんが忘れているのかな、もし忘れていたら前の車の三井損保を再登場しなければ・・・、なんてことまで考えていた。トヨタの営業マン各氏がそれぞれ保険の代理店のようなものだとは知らなかった。代理店がOKすれば、その日が休みであれ保険は成立する仕組みだとは知らなかった。アコードの時と同じ5万円ちょっとと、車両保険の2万円で、7万えんちょっとの契約となった。
- ◎最近のトヨタ車も友人の車で何度も運転しているので、スターターのボタンもエンジブレキもわかっている、これからは車のキーもポケットに入れておけばいいのかな。ナビの機能もちょっと調べなくっちゃ。ナビはスマホがあるのでいいとはいえ、まだまだスマホに慣れていないオレにとって、使い慣れたナビの方がいいかなとも思う。CDも入れられる、TVも映るらしい。よく街で聞く盗難騒音、あれが付いているらしく気を付けなくっちゃ。
- ◎「さあ 終わった 帰ります」こういった時に、西川さんが、「いえいえ これからです これから 永い付き合いになります」これを聞いて、なるほどと思った、仕事もなにもかもこれが大事だと。
- ◎店の方二人に見送られ、道路に出た。ほほほ、走るねえ、うれしいねえ、である。明日は展覧会の搬入、帰って二階に用意してあった絵を積み込みこんだ。あとの小物は明日でいいかな、さあ展覧会だ。

- ◎18日：車：ノアがやって来た。トヨタでうしろの座席の倒し方を教えてもらい、「そのままにしておいてください 今から荷 積みますから」と言って早速帰って2階の絵を積みだした。今回は20号10枚ぐらいを中心に、10,6,3、号をそれぞれ10枚ずつ、それと水彩画。ビール2ケース、コーヒー1キロ、カメラと三脚、芳名録やキャプション、パンフレット類・・・全部積むと広いうしろの空間が満杯になった。
- ◎19日：12時頃に車で出発。ミカさんを迎えに行き新御堂より画廊に着いた。シエスタ倶楽部のマリちゃんには1時半ごろ着の予定を知らせていたので、オーナーママと加藤さんの3人が待っていてくれた。「久しぶりです お願いします」の挨拶のあと荷を全部下ろした。「おおお えらい 忘れ物をした」今回も二つのキャンバスをつなぎ合わせる絵が四組ある。絵を繋ぎ合わせるための電動と手動のドライバー二つにネジ、キリ、ヒートンなどはちゃんと持ってきていたが、肝心のジョイント用の木の棒を積み忘れた、「あちゃあ」である。「ええい 苦労だが 吊って 二枚を 合わそう」とそれぞれの絵の配置を決めた。
- 永らく展覧会をしていない会場、ピクチャーレールと吊り金具がスムーズに滑らない、硬くなっている、おまけに金具の数が足りない。これまたまた「あちゃあ」である。
- ◎20日：展覧会初日、1時間半前の会場に入った。気になっていた会場撮影、水彩画の整理、なんじゃかじゃすませているとミカさん登場、絵の傾きを修正してくれた。またまたなんじゃかじゃすませているとオーナー親子が来てくれた。四人組の女性、秋のシニアカレッジの方がた、わざわざありがとうございます。☆松葉先生、お菓子をいただいた。ママの友人、娘さんが北野らしい。なおこちゃんとまさみちゃん、大笑いの末、山の約束。男二人、そのうち絵を描きに来るとか。飯田毅(六)さん。永田ひろみ・谷(六)様様、終わって居酒屋で2時間ほど。
- ◎21日：昼前にお客さんが来る前の食事でもとミカさんと歩き出したら、上田・中島のお二人と道で会いリターンして画廊に。ひとりが食あたりのようでそっと座ってもらって、その間3人で食事へ。ママのお友達が来られた。井戸(六)さんが来られた、これまたかるたを見てもらい昔話を・・・しっかりした足取りの長(中村)さんの登場で、病気の、デッサン会の、車運転の話を・・・そうこうするうち藤原田鶴(六)ちゃん登場。アトリエ仲間4人でわいわい。
- ◎22日：昨夜は画廊でジンを少しいただき帰った。写真の整理をただけで何もせずに寝た。早朝に目覚め河原に行き運動をして帰ったのは8時半。9時半に家を出て10時頃、1時間前に画廊に入った。お客さんが来ない、1時になって、「ちょっと食べてきます」と出かけ帰ってきたがやはり人は来ない。「あれれ ボウズかなまさか」と思っていた。市田・森のお二人、大池公民館で絵を描いている方がやって来た。お二人は長い時間ゆっくり楽しんでいただいた。そうこうするうちに、同級の内藤(六)君がやって来た、この画廊は2度目である、かるたを見てもらった。続いて山田さんが、なんと安藤(六)ファミリーが、建築の話しやら、山の話しやらが続いた。それから音田(六)さんがやって来た。音田さんは三菱で原子力をやっていたらしい。そのあと社会労務士事務所の方がお二人来られた。店じまいは鍵を閉めて帰った。
- ◎23日：塩崎ファミリーの登場。奥様とかいらし娘くん、とはいえ立派な大人。彼のジジババとは親しく付き合わせていただいた。夫人は油の絵描きだったが、先に、続けて塩崎さんが亡くなった。酒が好きで冗談の好きな万年文学青年のような方だった。息子のさとしさんはカメラマン、今回も数カットか撮ってもらった。池田さんは画廊の知り合い、漫画が上手い。野田さん元額屋さん。樋口さんは、京都山総美術画廊の元社員、いろいろ紹介してもらった昔話に花が咲いた。中井画廊を紹介してもらい2回個展をした。東京の会場にも出してもらいそのブースで座っていた。10代からの研究所仲間、布施君夫妻。嘉納さんは画廊の知り合い。倉橋さんが駆けつけてきて、「実は 娘の娘が 北野の3年生 かるたを見た え 同じ案内状が置いてある え あの 岡村さんが このかるたの絵を 描いたの すごい 感激・・・」大騒ぎである。岡島・福地サマサマ。「飲みに行こう」近所を何軒か探ししまわり、「馬刺し」の提灯を見つけ3階まで階段を上って中の雰囲気、「こりゃあ いいかも」と入った。「肉の 生は いやだな」と思いつつ出てきた刺身の盛り合わせは新鮮できれいの盛られている、そろり食って、「美味しいものだ」と日本酒2合をいただいた。おごってもらった。

◎24日：さあ今日は1000円パーティの日だ。朝から近所のスーパーで、巻き寿司、サンドイッチ、チーズ、ローストビーフなどを買った。朝からオーナーが以前のオレの展覧会の1000円パーティの写真を広げ、あれが、これが、と見せてくれた。かつての常連の何人かが亡くなったりも出てくる元気がなかったりである。今回も88歳の村上さんが来られ懐かしい話がいくつも出た。写真を撮ってくれていた中西市蔵、買い出しに行ってくれた江崎さん、塩崎が亡くなり、ピアノ向井さんももう出られない、東さんも案内状はがきが帰ってきた。水尾小学校区の三木先生が亡くなり、水尾の方がたも皆さん来られない。

上西夫妻がみやげを持ってきてくれたが、夜はちょっとと帰られた。今年はミカさんと番匠夫妻、難波さんの四人が十三に買い出しに行ってくれた。ビールは二箱、ワインは4本とたくさんいただきものがあった。「ノンアルコールビールが欲しい」「えええ」と驚いたが、昨今はこういうリクエストがままあるそうだ。

大塚(六)さん 番匠さんと啓子夫人 難波さん 佃(六)さん 原田(六)さん 小林さん  
前川さん 相澤さん：まもなくという時間に道に迷ったと電話。 高須(六)さん 福居さん 水谷  
(六2年下)さん 向井さん：シエスタの絵の先生 鍋島さん 高畠(六)さん 遠田さん  
木村さん 熊本(六)さん 落合(六)さん 藤井(六)さん  
後藤さん：茨木 小西(六)さん 徳平(六)さん 川上さん：茨木 斎(六)さん  
松本(六)さん：一升瓶を下げてきてくれた。

三宅さん 一色(六)さん 村上さん 澤山(六)さん 本庄さん 浅野(六)さん  
三宅さんはこの日健康診断の精密検査の結果が出て、「なにもなし」と車でそのままかけてくれたので飲めずに、ちょっと食べて帰った。

浅野さんは4時過ぎに来たため、例年やっている1000円の会費集めができなかったと悔しがっている。「4時  
て書いてあるやろ なんで遅れたの」

常連の道子さんは家族の都合で欠席。

常連の久子さんはご主人が亡くなられたばかり。番匠夫人が残念がっていた。

◎25日：この日は大池公民館文化展の絵の飾りつけをたのまれていた。8時半にジャスコに車を止め9時前に展示の部屋に行ったがまだ鍵がかかっていた。しばらくしてSさんがやって来て壁の前に絵を置いた。「ええとどう並べるか」床に絵を置き絵の間隔を決め、順番に吊るしていった。上段の絵が並んで、「急いでおられるのであとは自分らでどうぞ行ってください」とやさしい言葉にほだされ9時15分にジャスコに向かった。いつも土曜日は大阪方面の道が混む、1時間以上かかることが多かった、この時もひやひやものだった。ミカさんが駐車場にいてくれ9時半に二人で出発した。道は意外と空いていた、鳥飼方面から江口橋方面で画廊に着いたのは10時半にもなってなかった。前日前々日と多少お酒を飲んだのでけだるく用意を始めた。前日のパーティのあと、かたづけはして帰ったが、小さいごみが落ちている。この日は20歳代の井上さんと10歳若い内藤さんの二人だけだった。5時になり、1時間ほどですべての荷物を車に積み込み、オーナーを車で自宅まで送った。ミカさんを送りオレの自宅に8時前に帰り着いた。30分ぐらいかけ荷物を下ろしアトリエに上げ、食事をした。今回の展覧会、お客は少なかった。以前は毎日ひっきりなしに友人、知人が訪ねてくれた、3年間のコロナで交流が不通になっていたおかげ、「行ってやろうか 見に行こうか」というよりも、「億劫だまたにしよう」という雰囲気がおれのまわりの世相として伝わってくる。かるたのおかげで、北野高校の知り合いはたくさん来てくれた。ただあれだけ奉仕したのに“知らない人”の来訪は皆無だった。これも世相だ、オレの不人気のせいだね。オーナーが最初に立派な花を飾ってくれ感謝である、その花たちもごくろうさんの一週間、ミカさんもほぼ毎日手伝ってくれ感謝である。一週間に3回もお酒を飲み楽しかったが、いつもの河原での運動は2.3回しかこなせなかった。

◎朝8時に河川敷を歩いている。穏やかな日照りの早い朝、水の流れもたっぷり溜まったところは沈黙状態、まったく水は動いていない、曲がった先の細くなったところ、ちょっとざわざわ流れるところもある。水の上に朝陽がさして眩しい。

最近河原に来るオレのスタイルが以前と変わってきた、スタイルと言っても服装じゃなく行程の話。以前は自転車で堤防外まで来て、堤防を越え河川敷をエンヤコラ走っていた、今はエンヤコラ歩いている。歩くなら家から歩けばいいのではということで、展覧会の最中は家から歩いて大きくぐりと回った。どこかに行くならそのまま歩けばいいということで、先日はそのまま太田の元東芝の跡地に建ったイオンにタイツを買いに歩いた。街中では早歩きはちとみっともないので、普通につかつか歩いている。普通につかつかは“普通の早歩き”なれど、河原では腕を曲げて走っているスタイル、競歩スタイルかな、足は宙を浮いていない、「そらあウォーキングだ」二つの歩き方は違うんだ、なんて口を尖らしひとりで抗弁、ひとりごとなり。

◎河原のススキ、いい感じだねえ。白い穂先はまだある程度しっかりしている、綿のようにはなっていない。朝は寒かったが陽が登るにつれ暖かい、ススキの穂が陽にあたってキラリ。

◎土手の向こう側に工事現場がある。最近コロナが終わり建設ブームなのか、大きなクレーンが立っているところが多い、土手の向こうも二つの現場があり、ひとつは大きな倉庫棟、クレーンが5本も立って、もう5階ぐらいまでコンクリートが組み上がっている。その向こうもやや小ぶりながら大型店舗カナ、駐車場に上がるスロープがある。まずこのでっかい現場、大手の設計事務所らしく洗練された倉庫棟、側壁の帯に色を使っている。その帯の壁、手すりぐらいの高さ、下の方はブルーだった。「おおお ブルー きれいじゃないの」と思っていたが、上の層ほどそのブルーが薄くなって、最上階はほとんど白に近い。「おいおい こらあアカン 反対じゃ 上がまっさお 上に行くほど濃い青色がいいんじゃない」とオレの意見。

◎その話で気になるのが、最近竣工した茨木市のホール。有名建築家と大手ゼネコンの仕事らしい。少しずつ建ち上がって、「あれれ 打ちっぱなし いやだねえ 汚れるねえ」とまず思った。その次に養生シートが取り除かれ30メートル四方の大きな打ちっぱなし壁が出てきた。その壁の真ん中に25メートル直系のステンカラーの輪が化粧に付いている。「え 輪? もうちょっと考えられないのかねえ 発想が貧困だねえ」正直そう思った。有名建築家、内装の発想は多分いいものだろうけれど、この壁の扱いには彼もてこずったのだろう。焼却場近所の倉庫、その色計画にしろ、市のホール、大きな壁のワンポイントにしろ、自分が不得意とわかっているところは人の力を借りて“いいもの”を造る努力を、頭を下げる度量を、示さんと駄作になっちゃうよ。

◎「おい 岡村 お前は お前の中で どんな絵が 一番好きか」こんなことを聞かれるたびに、「今だ 今が一番好きだ 今描いている絵を 一番 大事にしている」こう答えていた。今回の展覧会もここ3.4年に描いたものの中から、青系の絵を探して出品した。本当にびっくりするぐらいたくさんある、そのたくさんの中からどれがいいかなと選ぶ作業をしていた。「駄作 駄作 駄作の山じゃ」なんてぼやきながらも、「えええ こんな画風もアリか こんな描き方もいいじゃないの」なんて自賛の絵もたくさんあった。今回の展覧会にはそういう毛色の変ったものは出品しなかったが、終わった今、出品漏れにあった連中とじっくり付き合ってみたいと楽しみにしている。とにかくやることがいっぱいあり、オレは忙しい、楽しいねえ。

残念だったのは、この画廊、オレが呼んだ人しか来ない、ほかの人は来ない。展覧会は一般の人や、その筋の人が来ないと、友人、知人たちとの懇親会で終わってしまった。